

を破壊し、レビ人を集めて民の内の三千人を殺害する。モーセ自身この民の行為が罪であったと言っているように(二十一節)、この一連の出来事はユダヤ教にとって非常に問題のある事件であり、彼らにとって信仰の危機と呼べるほどのものである。事実、新約聖書においてすでにキリスト教会がこの事件をもってユダヤ教を攻撃したという伝承も残されている(使徒言行録七章)。では逆に、ヘブライ語聖書が確立した後の時代のユダヤ教は、この事件をどのように解釈し、また克服してきたのか。その一端を翻訳聖書から明らかにするのが本報告の目的である。なお、翻訳聖書の底本となるヘブライ語原典は、紀元一世紀には現在とはほぼ同じ形で確立したものとみなす。

ヘブライ語聖書の最初の翻訳は、紀元前三世紀半ば頃までにエジプトのアレクサンドリアで生まれた、七十人訳と呼ばれるギリシア語訳である。これ以降少なくとも二世紀にはその他のギリシア語訳が流布していたと考えられるが、本報告ではギリシア語訳はこの七十人訳のみを扱う。続いて、アラム語訳であるタルグムが成立していく。現在確認されているモーセ五書のタルグムとして、オンケロス(三世紀)、偽ヨナタン(七世紀)、ネオフィティ(七―九世紀)、フラグメント(不詳)の四種類が挙げられる。その他、聖書はラテン語やシリア語など様々な言語に翻訳されていくが、それらはみなキリスト教徒によるキリスト教徒のための翻訳であるため、本報告では扱わない。

具体的に見ていくと、まず七十人訳では、イスラエルの民が子牛像を作ったのは「民が悪の中にいる」(原典二十二節)からではなく、民の「衝動」のせいだと解釈するが、この「衝動」は

ラビ文献によく見られる後述の「悪の衝動」とは異なる。その他の箇所はほぼヘブライ語原典の直訳であり、特に目立った解釈は見られない。続いてタルグム、特に一番加筆の多い偽ヨナタンには、「モーセ自身が定めた時間が過ぎてもモーセが下山しなかった」(一節)、「サタンがやってきて民の心を傲慢した」(同)、「民はモーセが神の前で燃やされたのを見た」(同)、「アロンはフル(モーセの甥)が殺されるのを見て恐れた」(五節)、「民は偶像崇拜に戯れた」(六節)、「民を迷わせたのは悪の衝動」(二十二節)などの記述がある。タルグムには、民の罪は罪として認めた上で、彼らが子牛像を求めた理由やアロンの行動の背景などの細かい描写を加える傾向がある。その上で、アロンに対しては一貫して同情的であり、民全体に対しても一定の同情の余地を残していると言える。こういった自由度の高い聖書解釈は、翻訳聖書だけではなくその他のユダヤ教文献にも見られることから、翻訳聖書がユダヤ教の聖書解釈の慣習に則っていることは明らかである。その上で、解釈を直接聖書本文に織り込んだという点に、その特徴があると言えよう。

「第二神殿崩壊」はいかに解釈されたか

勝又 悦子

紀元後七〇年、それまでのユダヤ教の中心であった神殿がローマ帝国のティトス帝によって崩壊され、以後、ユダヤ教徒は国家を失う。宗教的な中心を失うことになったこの事件は、ユダヤ教の転換期とされる。以後、祭司集団が率いる祭儀的なユダヤ教から、ラビ(トーラーの学びの師)が主導するトーラー

解釈と学びを中心に据えるユダヤ教に転換したとされる。本稿では、その衝撃が、最も近接した時代の、また今のユダヤ教のベースを作ることになったラビ・ユダヤ教においてどのように解釈されていたのかを考察する。

まず、Bar Ilan Responsa Project を使った統計から、「神殿崩壊」という術語は定着していないものの、「神殿」「崩壊する」の組み合わせは他の時代の文献と比較しても、ラビ文献の中では重要事項であったということが伺えた。

その中でも、言説数は多くはないが、紀元二〇〇年ごろラビ・イエフダ・ハ・ナスイによって集大成された「ミシュナ」中での「神殿」「崩壊」にかかわる記事に注目する。「ミシュナ」は、最初に編纂されたラビ・ユダヤ教文献であり、日常生活の諸習慣のベースとなり、タルムードの議論の中核となり、さらにそのタルムードがユダヤ教学、思想の中核になったように、ユダヤ教において非常に重要な書であるからだ。「ミシュナ」における神殿崩壊にかかわる記事の特徴は以下の通りである。

第一に、神殿健在時の記述に比べてはるかに分量が少ない。「神殿」「崩壊する」の組み合わせでヒットする言説数は、一例であった。しかし、第二神殿時代の神殿健在の儀礼、慣習等が詳細に、非常に具体的に鮮明に記録されている(ミシュナ・ビツクリーム三・三他多数)。神殿崩壊から一三〇年ほどの年月を経たときに、あえてこのような文書を残すことがまず選ばれたことは留意すべきだろう。

第二に、ラバン・ヨハナン・ベン・ザツカイのタカノート(法制定)に関して言及される例が目立つ(ミシュナ・ローシ

ユ・ハ・シヤナ四・一他五例)。タカノートとは、実情に合わせてラビたちが制定、あるいは改訂した法規である。「ミシュナ」では、*hitqin* (制定した) で検索すると、一一例ヒットする。しかし、タカノートの文脈で「神殿崩壊」が言及されるのはラバン・ヨハナン・ベン・ザツカイの五例のみである。他のタカノート(ラバン・ガマリエル二件、老ヒレル二件、主語無一件)は、離縁状の記載・借用状という、特定の法的状況における事例での制定であるが、ラバン・ヨハナン・ベン・ザツカイのタカノートは毎年巡ってくる年間行事(新年・仮庵祭)に関係して、かつては、神殿限定の慣習が緩和されていく過程が伺われる。ここでは決して、神殿崩壊の衝撃が語られることなく淡淡と変化が記述される。しかし、神殿崩壊に先んじて、棺桶に潜んでエルサレムを脱出し、敵の武將と交渉の末、ヤブネ学塾創設を認めさせたとされるラビ・ユダヤ教の立て役者であるラバン・ヨハナン・ベン・ザツカイと彼による神殿崩壊後の法の拡大を重ねることによって、年間行事の中に神殿の記憶を植えつけることになったように思う。

第三の特徴として、法的文書における時間の記載法に関して二例(同ギッティーン八・五)がある。神殿崩壊は完全に時間軸の一目盛りとして認識されていたことも伺える。

第四に、列挙型教訓とも言えるジャンルでの言及がある(同ソータ九・一二)。これこそ、神殿崩壊の衝撃を語るものであるが、事例数としては極めて限定的である。

以上の特徴は、「法的文書」としてのミシュナのジャンルも影響しているが、これらを「暗記する」ことによって、神殿

祭儀と神殿崩壊の記憶が日常に刷り込まれていったのではないか。

マイモニデス『イエメンへの手紙』考察

——共同体崩壊危機の克服——

神田 愛子

『イエメンへの手紙』(Iggeret Teman)は、マイモニデス(一三五―一二〇四)がタルムード学院長ヤコブ・ベン・ナタナエル求めに、一七二二年にイエメンのユダヤ共同体に書き送った手紙である。サラディンに反抗するシーア派が実権を握り彼らに改宗を迫ると同時に、メシアを自称する者が出現したことで共同体は混乱に陥る。共同体崩壊危機に際し、ラビとして彼がユダヤ伝統をどう解釈したかを本発表では考察した。

イエメンへの入植は、伝説では第一神殿崩壊(紀元前五八六年)以前とされるが、三世紀以降の記述では、第二神殿崩壊(七〇年)後に離散したユダヤ人が共同体を構築したらしい。イスラーム化以前のイエメンは五政体に分かれ、このうちヒムヤルの王が三八四年にユダヤ教に改宗したが、五二五年にエチオピアのキリスト教徒により滅亡。五七〇年にはササン朝ペルシャに、六二九年にはイスラーム軍に占領され、イスラーム化した。改宗した者もいたが、多くは改宗せずバビロニアのユダヤ共同体と密接な関係を保ったらしい。アデンが国際貿易港として重視された十一世紀から十三世紀にかけ、イエメンのユダヤ共同体はイスラーム圏の中で重要な役割を果たし、アイユーブ朝(一一六九―一二五〇)下のエジプトのユダヤ共同体とは

固く結束していた。メシア待望の動きはイスラーム化以前からあり、ユダヤ教徒とムスリムが互いに思想的に影響し合ったと見られる。このため、九世紀末に実権を握り、隠れイマームを否定したシーア派一派のザイド派は、メシア待望の動きをユダヤ教徒のイスラーム政権に対する反抗として捉える。アイユーブ朝下のユダヤ人は比較的平穏に暮らしていたが、イエメンの地方総督ムイズッディーン・イスマールがイスラームへの改宗を強制したことで、イエメンのユダヤ人共同体は恐怖に陥る。

手紙の論点は主に三点である。第一に、迫害はかねてから預言されていたが、それはじきに止む。かつては暴力(アマレク人、ネブカドネザル、ハドリアヌスなど)や言論(シリア人、ギリシア人、ペルシャ人)による迫害だったが、今の迫害はその二つを合わせ持ち、より効果的に我々の法を滅ぼそうとするものである。ナザレのイエスは、自分はすべての預言者により約束され神から使わされたメシアだといひ、律法を完全に廃棄しようとするがそれは成就しない(ダニエル二・一四)。もう一人の男(ムハンマド)が彼に続き、命令と禁止による新たな法を真似て作るが、それは自分自身に栄光を帰すためのものでしかない。ダニエル書七章八節の小さな角はこの男のことであり、先の三本の角はローマ、ペルシア、ギリシアである。強制的棄教は主が必ず止められる(BTケトボット三bなど)。第二に、メシアがいつ来るかは誰にもわからない。終末に関しては語ることが封じられ(ダニエル十二・九)様々な見解が生じるが(同十二・四)それらはいずれも成就しない(BTサン